

## 昭和20年代の韓国あて航空便

永吉 秀夫



韓国あて航空便(実通FDC)  
国内同額書状料金8円+2倍重量航空増料金16円×2  
麻布 S25(1950).322

1950年3月22日発行の放送25年記念切手の実通FDCですが、それ以外の要素が重要です。宛先が韓国であること、航空便であること、がポイントです。

封筒にはキジ航空16円が2枚貼られています。韓国は当時の5地帯制航空郵便地帯の中で第1地帯に属していました。キジ航空は各地帯あての航空増料金の額面で発行された加貼用航空切手で、書状10gごと、および葉書に、平面路料金と別にこの切手を貼るシステムとなっていました。韓国を含む第1地帯あての場合、この航空増料金が16円でした。しかし米国あてや欧州あての場合と違って航空郵便の利用は多くなかったため、また平面路料金との合算額(書状の場合40円)が塔航空や一般普通切手でも容易に対応できる料金だったため、キジ16円貼りの航空便カバーはなかなかの入手難となっています。

一方国際郵便としての基本料金(平面路料金)は、本来は24円(書状20gごと)なのですが、韓国あての場合は特例として、国内料金と同額とされていました(1953年1月14日まで)。戦前の朝鮮統治時代の名残です。そのため紹介品では、平面路料金分を8円記念切手で貼り、航空料金分は重量が10gを越えたためキジ航空16円2枚貼りという姿になりました。

料金合計は40円なので、やはり普通切手貼りとする方が簡単ですが、きちんと料金を分けて貼っているのは郵趣家便だからでしょう。もちろんカシエつきFDCであることから郵趣家便であることが明らかです。封筒右端が汚らしいこともあり、航空切手の切手展用作品には使いにくいマテリアルですが、ひっそりとマイコレクションに加えておくことにします。